

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720014

研究課題名(和文) テーテンス主要著作の読解を基礎としたカントと経験主義との関係の再検討

研究課題名(英文) Reconsideration of the relationship between Kant and empiricism through an examination of the main philosophical works of Tetens

研究代表者

佐藤 慶太 (SATO, Keita)

香川大学・大学教育開発センター・准教授

研究者番号：40571427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：カントと経験主義との関係を再検討するために、ヨハン・ニコラウス・テーテンスの哲学的著作を精査した。その成果として、次の2点が挙げられる。第一に、テーテンスが、観察的な方法に依拠して、経験の可能性の制約を析出しようとしていたことを明確化した。この点に、カントとテーテンスの共通の目標を見出すことができる。第二に、テーテンスの観察哲学が、カント『純粹理性批判』にどのような影響を与えたのかを解明した。結果的に、ある特定のタイプの18世紀ドイツ経験主義とカントとの間に、密接な関係があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this research project I examined the main philosophical works of Johann Nicolaus Tetens, in order to reconsider the relationship between Kant and empiricism. I obtained the following results. First, I showed that Tetens aimed to extract the condition for the possibility of experience through an observational method. On this point Tetens and Kant had a common goal. Secondly, I investigated how Tetens' "observational philosophy" influenced Kant's Critique of Pure Reason. Consequently, I showed that there is a close connection between Kant's philosophy and a particular kind of 18th century German empiricism.

研究分野：西洋哲学史

キーワード：カント テーテンス 超越論的哲学 経験主義 観察 想像力 形而上学 認識論

1. 研究開始当初の背景

(1) カント認識論についての研究状況

カント認識論研究において、その発展史を「ヴォルフ主義的経験主義の支配的潮流からの漸次的離反」という筋で理解する手法が主流を成している。またこの図式が経験主義 VS カント哲学という対立構図に一般化されることも少なくない。こういった手法は、カントの認識論における「ア・プリオリな総合」という契機の卓越性を明確にすることができるが、その反面、批判期のカントと経験主義との関係について踏み込んで考察する必要性を覆い隠してしまっている。近年、カントと経験主義の関係について再検討を行う機運が高まりつつあるものの、カントと経験主義との断絶を前提とした議論が多く、カントが経験主義から何を引き継いでいるのか、明らかにするには至っていない。

(2) 研究代表者のこれまでの研究

研究代表者は、本研究が始まる以前、『純粹理性批判』「演繹論」と「図式論」との関係の解明というカント解釈上の古典的な問題に取り組んできたが、その中で、カントにおいて、認識の条件から経験的な要素を排除することと、経験主義における主要概念（たとえば「想像力」）を援用することは二者択一の関係にはないこと、経験主義由来の概念の導入を考慮に入れることは、『純粹理性批判』を統合的に読むためにも不可欠であること、が明らかとなってきた（佐藤慶太「定義・像・図式『純粹理性批判』「図式論」の役割とその哲学史的位罫について」『香川大学教育学部研究報告 第I部』第135号、2011年、73-87頁、を参照）。ここにおいて、カントと経験主義との関係をより決め細やかに捉えるための視座が確保された。

研究代表者は、この視座の確保を実質的な裏づけのある哲学史研究につなげる糸口を探った。そこで着目したのが、カントと同時代の経験主義者、ヨハン・ニコラウス・テーテンスである。先行研究によって、『純粹理性批判』完成の直前、カントが集中的にテーテンスの名著を讀解し、ここから『純粹理性批判』の重要な概念のいくつかを入手したことが明らかにされている。ただし、従来の研究は、両者の用語上の一致や、論述の枠組みの類似性を指摘するにとどまっており、経験主義者であるテーテンスからカントが影響を受けうるのか、またこの影響は、カント哲学の核心部分に及んでいるのかどうか、といった点について踏み込んだ考察はなされていない。

こういった先行研究の状況を踏まえて、研究代表者は、カントとテーテンスのつながりを明確化することによって、カントと経験主義の関係を、「ヴォルフ主義的経験主義の支配的潮流からの漸次的離反」や、「因果関係の客観的妥当性に関するヒュームの懐疑の

克服」といった枠組みを通じて処理するのではなく、よりきめ細やかに捉えることができるのではないかと考え、本研究の計画を立てるに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、テーテンスの主要著作の讀解を通じて従来見過ごされてきたカントと経験主義との関係に光を当て、それに基づいてカントの認識論の内実、その哲学史的位罫の再検討を行うことである。

より具体的に言うと、研究目的は以下の三つに区分される。

(1) テーテンスの主要著作を詳細に讀解し、テーテンスの認識論の全体構造を解明する
(2) 両者の関係を踏まえて、カント認識論の形成過程および内的構造を改めて考察し、その見過ごされたアスペクトを浮かび上がらせる

(3) 経験主義とカントとの関係を統合的に説明しようとする18世紀ドイツ哲学の枠組みを見出して、そのなかにカント認識論を改めて位置づける

3. 研究の方法

上記の三つの研究目的に応じて、次の三つの方法を採用する。

(1) 第一の目的のためには、テーテンスの二つの名著、『一般思弁哲学について』(1975: Ueber allgemeine Speculativische Philosophie)、『人間本性とその展開についての哲学的試論』(1977: Philosophische Versuche über menschliche Natur und ihre Entwicklung)の精讀を行い、テーテンスの問題意識と、その認識論の全体構造を明らかにする。この際、既存のカント解釈の枠組みを手引きとしてテーテンスを讀解するのではなく、テーテンス自身の問題意識、概念の用法、論述の仕方を偏りなき視点から明らかにする。

(2) テーテンスとカントの関係を明らかにするにあたっては、カントがテーテンスについて遺したコメント(書簡、遺稿)を手がかりとする。

また、カント認識論の形成過程および内的構造を再検討する際には、テーテンスの影響が指摘されており、かつ『純粹理性批判』の核心を形成するものに焦点を絞る。具体的には、transzendentalの概念、および第一版の「演繹論」である。

(3) 18世紀ドイツ哲学におけるカント認識論の位置づけを再検討するにあたって、カント自身が設定した哲学史の枠組みには依拠しない。この枠組みの背後には、自身の哲学の独自性を際立たせるといふ狙いが存しており、批判哲学の成立や、それへの影響関係を

適切に見定めるためには、むしろ足かせになる可能性がある。本研究では、テーテンスの著作を一つの手がかりとして、カント認識論の哲学的な位置づけを再検討する。特に『人間本性とその展開についての哲学的試論』は、テーマごとに焦点となる問いを提示したうえで当時の論争を再現し、それを踏まえて自身の主張を述べていくという構成を採る大著（総頁数 1618 頁）であり、いわば「18 世紀哲学の優れた概括」である。それゆえ、18 世紀ドイツ哲学の構図を捉えるために、この著作は適切な手がかりをわれわれに与えてくれるはずである。

4. 研究成果

上記の研究目的および研究方法の区分に応じて、研究成果を述べる。

(1) テーテンスは、従来の研究、とりわけ国内の研究においては、徹底的な経験主義者として捉えられることが多かった。このようなテーテンス理解のもとでは、テーテンスからカントへの影響を、非本質的なものとみなす解釈が出てこざるを得ない。しかし、本研究における『一般思弁哲学について』と『人間本性とその展開についての哲学的試論』の読解を通じて、ことからはそれほど単純ではないことが明らかとなった。テーテンスは、「観察的方法」を採用してはいるものの、経験の可能性の制約の析出を狙っており、この目的を、経験の形式（心の能動的な働き）と質料（心が受容するもの）の区別を通じて達成しようとしている。この点でテーテンスとカントはおなじ目的を共有しているといえてよい。

また本研究は、テーテンスが、みずからを、知性の働きをすべて感覚作用（受容性）に還元しようとする立場（コンディヤックなど）と、表象能力能動性を軸として感覚を「混濁した表象」として処理する立場（ヴォルフ学派）の中間に位置づけ、双方を批判している、ということも明らかにした。ここから、『純粹理性批判』刊行以前のドイツの状況を「ヴォルフ主義的経験主義の支配的潮流」という概念のみをたよりに読み解いていく従来の解釈が、不十分であることも示された（5 の〔雑誌論文〕を参照）。

(2) テーテンスからカントへの影響関係およびそれに基づくカント認識論の研究は、特に *transzendental* の概念と、「演繹論」を中心に行われた。

まず *transzendental* の概念について言うと、この概念がテーテンスにおける *transzendent* の概念の強い影響下にあることが、本研究によって裏付けられた。*Transzendental* の概念は、しばしばその多義性が問題となる。本研究は、テーテンスにおける *transzendent* の概念をどのようにカントが継承したのか、という問題に取り組んだが、*transzendental* 概念における多義性の問題にも一定の答えを与えること

ができた（5 の〔雑誌論文〕のうち、特にを参照）。

『純粹理性批判』の「演繹論」に関する研究では、特に『純粹理性批判』初版刊行時（1781 年）のカントが、テーテンスの『人間本性とその展開についての哲学的試論』における心の能力の理論を前提として「演繹論」の論述を進めていることを明らかにした。とはいえ、カントはテーテンスの理論をそのまま受け入れているわけではない。テーテンスにおける心の能力の理論は、経験的概念の成立のために活用されるものであること、またこの理論が妥当性を持つためには、さらに超越論的なレベルでの心の能力の理論が必要である、ということを示している。本研究は、この影響関係の解明に基づいて、『純粹理性批判』第一版「演繹論」が、単に経験の可能性の制約のもっとも根源的な層（カテゴリー）の妥当性だけでなく、経験的な概念の成立についても、一定の説明を与えようとしていることも、明らかにした（5 の〔雑誌論文〕のうち、特にを参照）。

(3) 18 世紀ドイツ哲学におけるカント認識論の位置づけの再検討については、まず 18 世紀ドイツ哲学を理解するための枠組を再構築するための手がかりが得られたことが、成果として挙げられる。すでに述べたように、従来の研究において支配的なのは、18 世紀後半のドイツ哲学を「ヴォルフ主義的経験主義の支配的潮流」VS 批判期のカント、という対立構図で読み解く解釈である。しかし、この構図にもとづくと、経験主義的な方法を採用する哲学者からカントへの影響関係が、すべて非本質的なものとして処理されてしまう可能性がある。本研究では、テーテンス研究に基づいて、当時の状況を、心の能動性 VS 受容性という枠組で読み解く可能性を示した。この枠組みを用いると、当時の経験主義の内部における対立を浮かび上がらせることができるとともに、経験主義のある特定の陣営が、カントに影響を与えうる存在であったことを示すことができる（5 の〔雑誌論文〕を参照）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

佐藤 慶太「テーテンスとカント - 「超越的 / 超越論的」をめぐって」日本哲学会編『哲学』No.66、2015 年 4 月、143-159 頁〔査読有〕。

佐藤 慶太「テーテンス『人間本性とその展開についての哲学的試論』とカント」『香川大学研究報告第 1 部』143 号、2015 年 3 月、121 - 138 頁〔査読無〕

佐藤 慶太「テーテンス『一般思弁哲学について』とカント」『香川大学教育学部研究報告第 1 部』135 号、2013 年 3 月、

145-162 頁〔査読無〕。

〔学会発表〕(計2件)

佐藤 慶太「カントとテーゼンス -
transzendent(al)をめぐって」カント研
究会第 279 回例会、2014 年 3 月 22 日、
キャンパスプラザ京都(京都府京都市)
佐藤 慶太「『純粹理性批判』「図式論」
の役割とその哲学史的位罫について」カ
ント研究会第 263 回例会、2012 年 8 月 26
日、法政大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計2件)

共著『高等教育における市民的責任感の
育成』加野芳正・葛城浩一編、2014 年 3
月、このうち、佐藤 慶太「第 2 章 近
代的大学創設期におけるドイツの大学論
と大学における市民的責任感の育成」
(15-32 頁)を執筆。

共著『カントを学ぶ人のために』(総頁数
414 頁) 牧野英二・有福孝岳編、2012 年
5 月、このうち、佐藤 慶太「第 5 章 カ
ントの歴史哲学」(308-322 頁)を執筆。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 慶太 (SATO, Keita)

香川大学・大学教育開発センター・准教授

研究者番号：40571427